

国語科授業改善のためのカリキュラム設計のあり方

研究代表者：和歌山大学教育学部 丸山範高

共同研究者：和歌山大学附属中学校 今田風花

1. 問題意識と成果の概要

本研究の目的は、現職教員・大学教員・大学学生が、互いに協同して国語科授業づくりに関わる実践的知見、特に、単時間ごとのものではなく、年間を通じての子どもの学びを見通した授業づくりの知見を高め合うことである。具体的には、連携校の現職教員が実践する国語科授業を大学教員・大学学生が観察した後、三者で当該授業について協議することで、子どもたちの学びを引き出す教材研究や授業展開のあり方などについて知見を深め合うという取り組みである。

現職教員は、自分の授業を複数の他者に観察してもらうことによって、指導内容が子どもの学びにつながり得ているのかを確認できる。指導内容が子どもの学びに結びついていない場面があれば、教材の扱い方を変える、別の授業展開法を模索する、授業外での子ども理解に努める、など、教師として今後取り組むべき課題の見通しを持つことができる。対照的に、子どもの学びが高まった場面があれば、その状況・背景をふり返ることで、教師としての専門的知見を概念化することができよう。

一方、教職志望の大学学生は、文献からだけでは学び得ない実践的知見を獲得できる。つまり、授業とは、教師が既成の理論を機械的に用いればよいというものではなく、教室の出来事を慎重かつ丁寧に見取り、場に応じた適切な授業技術を取捨選択することで成立するという事に学生たちは思い至るであろう。また、教師の行動の1つ1つには、その背後に育てたい子ども像を見通した、その教師ならではの意図があったり、教師自身の主体的な教材分析が反映されたりといった、教師の創造性が発揮されていることを認識するであろう。

本研究により得られた知見は、教師の個性を尊重しつつ授業研究を進めることこそが授業改善につながるという共通見解である。授業研究では、どんな学習課題のもと、教師と生徒がどう関わり、どんな学びが実現していたか、あるいは、実現できなかったかという教室の文脈を丁寧に見取りながら、関係者が協同して協議を深めることが重要である。

2. 活動の概要

(1) 第1回(2019年6月5日): 授業観察および研究協議

○学年・組: 2年D組

○教材: 佐藤克文「生物が記録する科学—バイオロギングの可能性」(光村図書)

a. 観察授業の概要

- ・ 単元1時間目
- ・ 本時のめあて【本文を序論・本論・結論に分けることができる。】
- ・ 学習活動【①段落番号を付ける(形式段落) ②班ごとに段落読み ③本文を序論・本論・結論に分ける(班ごとの意見発表・共有・班ごとに再検討と発表・まとめ)】
- ・ 全体での共有場面では、分け方のみならず、理由もあわせて発表した。

b.研究協議の概要

- ・ 班活動に集中できない一部の班はあるが、教師の指示（学習すべき内容）は受け止めることができている。
- ・ 本文を読まないと序論・本論・結論に分けられないことの自覚が生徒にあるため、集中力の程度差はあるものの、全員が教材に向き合っている。
- ・ 序論・本論・結論に分けることが次時の授業の土台となることは、これまでの授業から生徒は理解できている。次時の授業では、序論があるから本論につながることを学習させる予定である。
- ・ 序論・本論・結論に分ける意味・効果は、文章を分けて、まとまりごとに読むことで、読みやすくなるとともに、読み深められるからである。
- ・ 本教材を読む上での基礎となる知識・技能は、「バイオロギング」などのキーワードが持つ概念を理解すること、図表と文章とを対照させて読み取ることである。
- ・ 基礎となる知識・技能を活用し、筆者の書き方の工夫（読者にわかりやすく説明するための工夫）を考えさせること、さらに、その工夫を生徒自身の書く文章に取り入れることを学習の到達点と考えている。
- ・ 全体の傾向として読む力の高い生徒が多い。しかし、書く力については課題を抱えている生徒が目につく。同様な表現を繰り返す、字数が埋まらない（書けない）などの生徒は、語彙力が不足しているために表現の幅が狭いことが原因と考えられる。また、書き上げた文章を見直し推敲することに抵抗を感じる生徒、書き言葉・話し言葉の区別ができず両者が混在する均整のとれない文章を書く生徒もいる。
- ・ 今後の授業について、教師の指示を最低限にとどめ学習リーダーを中心にグループ別学習をさせたいと考えている。ただし、この場合、教師が事前に良質の学習課題を設定することと、生徒が学習（達成感）の見通しを持てることが重要である。それができていないと、活動が無秩序になるおそれがある。

（２）第２回（２０１９年１２月１２日）：授業観察および研究協議

○学年・組：２年Ｂ組

○教材：安田喜憲「モアイは語る―地球の未来」（光村図書）

a.観察授業の概要

- ・ 本時のめあて【序論で提示された問題についての解答をまとめ、共有し、理解することができる。】
- ・ 序論で提示される４つの問題提起を４人グループ内で分担し、各自１つを担当する。問題に対する解答が書かれている箇所を探し、要点をまとめる。《個人学習》
- ・ 各自の担当箇所を班内で発表し、筆者の問題提起に対する解答を共有する。《グループ学習》
- ・ 教材の内容に関する確認テスト（選択肢型設問）

b.研究協議の概要

- ・ 生徒が抱える課題は書くことを苦手としていることである。具体的には、文字を埋めることはできるが、要点が抜ける・不適切な助詞の使い方をする・論理一貫性が欠けているといった点に課題が見られる。

- ・ そのため、単元の計画においては、書く活動につなげる構想を心がけている。本単元では、教材文の構造をつかみ、文章の型を意識させ、最終的には教材の続きに相当する内容の意見文を書かせる計画である。
- ・ グループ内での共有活動を取り入れているのは、習熟度の低い生徒も含め、クラス全員が一定程度のレベルで教材が読めることを保障するためである。また、グループ学習は、個別学習よりも楽しみながら学習を進められるという利点もある。
- ・ 授業づくりにおいて留意していることは、初めにゴール（学習の到達点）を示すことである。特に、古文などの場合、ただ教材を読むというだけでは、生徒の学習意欲が減退するため、作品のどこが面白いかをゴールとして提示するように心がけている。
- ・ 机間指導を含めた生徒への個別支援は控えめにしている。わからないことを教師に聞くのではなく、生徒たち同士で聞き合い、主体的に解決していくことを期待しているからである。
- ・ 発表において書き足りないこと、書き過ぎないことは、班活動において修正されることを期待し、書き方等のフォーマットは示していない。事前に示した最終的なゴール（イースター島と日本の共通点を見出す）に学習が帰着すれば、その過程は細かくこだわらないこととしている。
- ・ 今後の抱負として、生徒の国語への苦手意識を低減し、生徒たちが自分たちで問題を発見・解決していける授業をしたい。ただし、文章を読む（たとえば、本時で行ったような、問題とその解答を班活動により共有するなど）ことまでは生徒たちに委ねられるが、その読みをふまえて書くための課題は教師側から提示しないと学習が深まらないと思われる。